

平成20年度 自己評価表

鳥取県立鳥取工業高等学校

年度 当 初			評価結果	
評価項目	具体目標	具体方策	目標達成状況	評価 次年度の改善方策
1. 主体的な学びの涵養	○1日の授業以外の学習時間が、理数工学科では2時間以上、工業科では1時間以上となること、30分未満の生徒の割合が30%未満となることを目標とする。 ○わかる授業、魅力ある授業を創造するために、全教科が年1回以上の公開授業を実施する。 ○生徒対象の学校評価アンケートで「授業の工夫がなされている」に肯定的な生徒の割合が80%以上になるように努める。	○年2回の自宅学習調査や各定期試験後の個人面談をとおして学習習慣の定着指導を徹底する。 ○授業での生徒の理解度に注意を払いながら個に応じた指導を図りわかりやすい授業を日々工夫する。 ○補習や資格検定指導の充実を図ることで学ぶ意欲の喚起や自主的な学びにつなげる。 ○手作り教材の活用やノート点検・個別指導の徹底を図るなどして基礎学力の定着に力点を置いた取り組みを推進する。	○課題指導、添削指導、面談指導等の効果が徐々にではあるが現われた。自宅学習調査では、理数工学科の学習時間は第1回目で平均11.3分、第2回目で8.8分と昨年より改善されたが、目標値には達しなかった。工業科の学習時間は第1回目で平均6.1分、第2回目で5.8分と昨年より改善され、ほぼ目標値は達成できた。しかし、全校で30分未満の生徒の割合は第1回目で2.9%、第2回目で3.5%と、昨年度に比べ減少したものの学習意欲のない生徒の指導は課題である。 ○授業改善の一貫として取り組んでいる全教科年1回以上の公開授業は計画どおり実施できた。 ○課題作成、ノート点検などの個別指導を行うことにより、生徒対象の学校評価アンケートで「個に応じた指導がなされている」に肯定的な生徒の割合は7.5%と、前年度の6.9%を上回った。 ○生徒対象の学校評価アンケートで「授業の工夫がなされている」に肯定的な生徒の割合は77%で、前年度と変化なく目標値は達成できなかった。	C ○学習習慣の定着を図るため、自宅での課題を定常的に課していく。また、個々の生徒に対する面談指導の内容や回数等の工夫を図ることで、進路意識や目的意識を生め、学習意欲を喚起するよう努める。さらに、土・日については課題等により自宅学習時間を確保するよう指導する。 ○基礎学力の定着と分ける喜び、学ぶ楽しさが体感できる授業実践のためにも、一方的な講義形式に陥ることなく、双方向、参加型の授業など生徒と共に創りあげる授業を実施する。また、主体的・能動的に取り組む教材の作成、思慮の質を高める教材の精選、公開授業の充実等に努め、授業改善、指導方法の向上に努める。 ○課題作成やノート点検による個別指導を引き続き徹底する。補習など、放課後指導の一層の充実を図る。
	○生徒対象の学校評価アンケートで「生徒会活動などの生徒の主体的活動を支援している」に肯定的な生徒の割合が75%以上になるように努める。 ○部活動の延べ入部率70%以上をめざすとともに、県大会入賞者数、中国大会・全国大会出場者が前年度以上となるように努める。 ○強化指定の部の増加をめざす。	○自己理解を深めさせ、生活目標・進路目標を確立させるための複合的な取り組みを進める。 ○生徒の自主性を育成し実践力を伸長するため、委員会活動を各分掌・各学年で指導・支援するとともに、生徒と職員が一体となって取り組む。 ○部活動において、生徒の活発な活動を維持するとともに文化部活動の充実(活動内容・活動日の充実、部員数の増加)を支援し、全体的な活性化を図る。	○自己理解を深め、進路目標を確立させるために、定期的な進路希望調査や進路LHR、進路説明会、進学補習の取り組みを行なった。 ○生徒対象の学校評価アンケートで「生徒会活動などの生徒の主体的活動を支援している」に肯定的な生徒の割合が7.2%と、目標値に近づくことができた。月毎に学年別の生活目標の達成を行い、協力することや集団の中での個の役割を考えさせ、互いに評価し合って、よりよいものをめざしていく雰囲気醸成にいくよう努めた。 ○体育祭、文化祭等の学校行事や各種委員会活動に関しては、生徒の主体的な活動の場となるよう、生徒の企画や運営を尊重し、教職員はそれを支援する方向で臨んだ。 ○部活動延べ入部率(7.8%)は目標値を達成できたが、文化部の入部率を上げることが課題である。中国大会出場者数は13.1名(昨年度11.7名)、全国大会出場者数は9.5名(昨年度5.3名)で、目標を達成することができた。 ○昨年度の実績が評価され、従来のバレーボール部、フェンシング部、バドミントン部に加え、バスケットボール部が強化部指定となった。	B ○進路目標を確立させるため、外部での様々な進路行事にも積極的に参加を呼びかけ、進路希望調査や進路LHR、進路説明会、進学補習の取り組みを進めていく。 ○自己理解を深めさせ、生活目標・進路目標を確立させるための複合的な取り組みの一つとして、来年度1学年を対象とした「Will Seed」(課題解決型プログラム)を実施する。その中で、ケースエクササイズを重視しながら適応力や問題解決能力の向上をめざす。 ○学校行事や各種委員会活動で生徒が主体的に活動できるよう、事前事後指導や連絡・調整のための会を多く設定するなどの工夫を図る。 ○文化部活動において、外部指導者招聘事業等の活用を図ったり競技会や作品発表の場を提供することで、文化部の振興を図っていく。
2. 豊かな人間性の育成	○「Q-U調査(楽しい学校生活を送るためのアンケート)」を全生徒に実施し、学級分析から望ましい集団づくりに心がけるとともに支援を要する生徒の把握に努め、不登校や長期欠席者数が前年度以下となるよう努める。 ○差別解消に向けて教職員の一人一研修参加100%をめざす。 ○日常的に生徒と関わる時間の確保に努め、カウンセリングマインドを持ち、個々の生徒の良さを認めながら意欲喚起を図る個別指導をとおして、生徒理解の一助とする。	○年2回「Q-U調査」を全生徒を対象に実施し、分析結果を学級や個々の生徒の理解に活用する。 ○教職員自らが研修等をとおして自己を振り返り、学ぶ姿勢を持ち続けるとともに「全教科・全領域での人権教育」を実施する。 ○全職員が当番制で実施している朝の交通安全指導をとおして明るい人間関係をつくり、コミュニケーションの第一歩である挨拶運動を進めていく。 ○課題の早期発見、早期対策に努める。	○Q-U調査は2回実施した。Q-U調査の分析と活用方策のための職員研修会を実施したが、分析結果を生徒指導に十分に活かすことはできなかった。不登校や長期欠席者数は、家庭との連携や教育相談活動などにより前年度より減った。 ○一人一研修参加率は6.5%に留まり、目標を達成できなかった。 ○人権教育の達成度については確認ににくい面があるが、LHR実践の改善・工夫に取り組めた部分と、人権尊重の精神に溢れる学びの場の実現、人権問題を解決しようとする熱意と使命感を持った教職員集団といった観点では改善の余地があるなど、両方の面がある。 ○朝の交通安全指導などをとおして、挨拶・声かけ運動も積極的に、継続的に実施できた。 ○相談活動については、学年、学科が保健相談部と連携して円滑に適切な対応を行うことができた。ただ、からかいやいやがらせがいじめに発展するケースがあった。	C ○Q-U調査の分析と活用方策のための職員研修会を定期的に実施し、分析結果を生徒指導に活かせるように努める。 ○教職員自らが人権教育の重要性を再認識し、全ての教育実践に結びつけていけるよう、職員研修の工夫・充実を図る。 ○個々の生徒を理解し把握した上での指導・助言や望ましい方向への人格完成のための援助を行うためにも、学校と家庭との情報の共有化に努めるとともに連携の強化を図っていく。
	○豊かな心を育む読書活動の一環として、年間の図書貸出冊数が前年度対比10%増となることをめざす。 ○各種ボランティア活動の年間参加者数を昨年度以上となるよう努める。 ○命の教育である性教育に関する時間を年間2時間以上確保する。 ○TEAS(鳥取県環境管理システムⅡ種)で掲げている今年度の環境改善目標の達成をめざす。	○図書館を利用した授業実践や企画展示、図書館便り等の広報活動に努めることで図書館に足を運ぶ生徒を多くする取り組みを進める。 ○各種ボランティア活動は、社会の一員としての自覚を深め、生徒の学びと成長に寄与するものであり、積極的な参加を推奨する。 ○性教育に関する講演会やLHRをとおして正しい異性観を持ち、意思決定・行動選択のためのスキルを身に付けることで性への自立・共生を目指す。 ○管理美化委員の積極的な活用を図るとともに環境宣言の周知徹底を図り全生徒の取り組みとなるよう努める。 ○健康づくりのために食の環境整備や食をとおして心を育てる観点から食育教育を推進する。	○図書の貸出冊数は減っているが、企画展示、図書館便り等の広報活動に努めたことで図書館入館者数は増加している。ここ数年、図書委員の活動が活発化しており、生徒による自主企画イベントが充実してきた。 ○ボランティア活動の参加者数は103人であり、前年度の96人より増加した。 ○性教育講演会、性教育LHRを各学年とも年間2時間以上確保することができた。豊かな人間性形成に繋げるねらいを持って性教育を実施したが、自己の性に対する認識を確かにし、人間としての生き方を提案する機会となっている。 ○TEASで掲げた環境改善目標のうち、TEASに関するLHR・講演会の実施は達成、電力消費量も前年度対比2.4%減で達成できたが、グリーン購入の推進については目標を達成できなかった。	B ○読書の推進を図るとともに、心豊かな自己形成のための幅広い知識・情報の提供に努める。図書委員だけでなく、多くの生徒が参加し取り組める企画や活動を考える。 ○豊かな人間性を育むためにも他者との多様な関わりや読書、地域貢献活動等を奨励し、多くの気づきやこれからの生き方のヒントを得させる。 ○マナーアップ運動等の取り組みに関しては、生徒たちへの積極的な参加を促し、よりよい社会を創造していく一員であることを自覚させる。 ○性教育の必要性を理解してもらうためにも、保護者に講演会や授業参観を促す。また、講演会の講師の人選や内容の工夫・改善に努め、性教育を適切かつ効果的なものにする。 ○助け合い、共に生きる社会を築いていくためにも、人と人との繋がりをもつとともに思いやりの心を醸成することをねらいとして、各種講演会を開催する。 ○グリーン購入の推進については、鳥取県グリーン購入基本方針に基づいた「鳥エグリーン購入調達リスト」を作成する。
3. キャリア教育の充実と進路保障	○生徒対象の学校評価アンケートで「資格取得や検定のための指導に積極的に取り組んでいる」に肯定的な生徒の割合が80%以上になるように努める。 ○各種資格取得、検定を奨励し、専門教科への関心を深めるとともに進路決定に役立てる。合格者数前年度対比5%増をめざす。 ○ものづくりコンテスト等の各種競技会への積極的な参加を促し、H.P等にも結果報告や感想等を交えた記事をタイムリーに掲載する。また、競技会入賞者の数を昨年以上となるよう努める。	○資格検定年間スケジュールを提示し、専門教育部をとおして各種検定の案内・申し込みの集約を行うとともに受験者・合格者のデータ化を図って意欲喚起につなげる。 ○的確な技術指導ができるよう、企業での教職員研修等を継続実施していく。 ○各科毎の課題研究発表会をとおして探究心や表現力を養成するとともに複数の科にまたがったテーマを設定し実施する。 ○明確な職業意識や勤労観を養うために企業見学会を2、3年生を対象に実施してきたが、今年度から早期からの意識喚起の必要性から1年生からの実施とする。 ○工業学科2・3年生を対象とした3日間のインターンシップに加えて、3年生の希望者を対象とした長期休業中5日間程度のインターンシップを実施する。	○生徒対象の学校評価アンケートで「資格取得や検定のための指導に積極的に取り組んでいる」に肯定的な生徒の割合が8.4%と、前年度より若干増え目標を上回っており、指導の実績が生徒たちにも評価されてきている。 ○各種検定の受験を奨励し、そのための特別補習の継続的な指導に努めてきているが、生徒の意欲に大きな差があり、近年二極化の傾向が顕著になっている。トータルとして合格者数は前年度対比△2.7%と大幅な減となったが、合格率は微減に留まっていた。 ○ものづくりコンテスト等の各種競技会への積極的な参加を促し、社会人講師や教職員による指導を実施してきた。しかし、中国大会や全国大会への出場者は昨年度より減った。 ○高度な技術指導を可能とするための教職員の企業研修は従来から取り組んでいるが、今年度新たに機械科全職員を対象に実施した。 ○今年度初の試みとして、複数の科(機械科、制御・情報科、電気科)合同による課題研究テーマに「電気自動車製作」を設定し、実施した。	B ○専門的な知識の深化や学習に対するモチベーションを高めるためにも、原因の究明と各種資格取得の指導体制の見直しを図っていく。 ○各科毎の課題研究発表会をとおして、引き続き探究心や表現力を養成していく。 ○技能検定やものづくりコンテスト等の実技指導を充実させ、各種競技会へ挑戦する機運を醸成し、学んだ知識や技術を活かす発展的な取り組みに繋げていく。 ○インターンシップや企業見学の取り組みと進路LHRの実施時期・内容が合致するよう見直し、体験がより職業観等の育成に生かされる機会としていく。 ○先端技術に関する知識や実践的指導力を習得するための教職員の企業研修は、実施する学科とメニューを拡大する。
	○生徒対象の学校評価アンケートで「きめ細かな進路情報の提供や個に応じた進路指導を行っている」に肯定的な生徒の割合が80%以上になるように努める。 ○3年間を見通した進路指導を行い、自己の適性を理解した進路選択ができる力を育む。そのための進路に関するLHR時間数を1、2年生は年間5時間以上、3年生は年間7時間以上確保する。 ○年間選考・欠席者数を前年度対比5%減をめざす。 ○定着指導の一貫として、工業各科が4社以上の企業訪問を実施する。	○各学年毎に進路LHR、進路説明会・模試・諸検査等を行い、進路意識を高め個々の進路に応じた適切な指導を行う。 ○保護者の体験に学ぶ会、企業見学会、現場体験学習、社会人講師等をとおして生徒の進路意識の高揚を図り、自発的に進路決定できる能力を養う。 ○定着指導の充実方策の一環として、1学期中に進路指導担当職員に加えて各科職員による企業訪問を実施し情報交換することで連携を密にする。 ○選考・早速・欠席削減のため選考・早速カードの活用や保護者への連絡を徹底するとともに全職員による朝の登校指導を実施する。 ○学年別月間努力目標を設定し、生徒が目標達成に向けて努力し、考え工夫する契機とする。	○生徒対象の学校評価アンケートで「きめ細かな進路情報の提供や個に応じた進路指導を行っている」に肯定的な生徒の割合が8.1%と、前年度より3%増え目標を達成した。 ○職業観や勤労観の高揚を図り、進路目標を明確にするため、進路LHRを1・2年生は年間5回、3年生は年間9回設けて、3年間を見通した進路指導を行なった。 ○本年度から1年生を対象に「企業見学会」、「保護者の体験に学ぶ会」を企画・実施したが、早期に生徒の進路意識の高揚を図り、自発的に進路決定できるようなしなげづくりに努めた。 ○服装指導や挨拶指導とあわせて朝の交通安全指導は、全職員が当番制により年間をとおして実施した。その結果、遅刻者数前年度対比2.5%減・欠席者数1.4%減と顕著な改善が見られた。しかし、挨拶の返さない生徒や注意を繰り返さないというルールを守れない生徒が一部にあるのが実態である。	B ○各学年毎の進路LHR、進路説明会、保護者の体験に学ぶ会、模試・諸検査等の内容を適宜見直しながら、引き続き生徒の進路意識の高揚を図り、自発的に進路決定できる力を養うとともに個々の進路に応じた適切な指導を行っている。 ○定着指導の充実や求人依頼の一環として、引き続き進路指導担当職員と各科職員による企業訪問を実施し、連携を密にしていく。 ○朝の交通安全指導や校内巡視に関しては、全職員が協力し継続した取り組みとする。 ○基本的な生活習慣を確立するために、その場での指導や助言を行うなど一貫した指導方針のもと、全職員が一致して継続した指導に当たる。それと同時に、家庭の協力が得られるよう日常的に連絡を密にする。
4. 地域や産業界とのパートナーシップの確立	○「地域産業の担い手育成プロジェクト」での懸念事項である専門性を活かした分野での企業実習となるデュアル版インターンシップの導入についての検討を進める。その際1学期中に先進校視察を実施する。	○「地域産業の担い手育成プロジェクト」が2年目を迎えるが、教育プログラムの検証、熟練技能士の招聘、技術力向上を目的とした教員研修、企業でのインターンシップ等の具体的な実践に取り組む。 ○企業との合同課題研究の本格実施を進める。	○今年度は、企業での実体験を重視したメニューを実施するとともに、デュアル版インターンシップの実施形態について実行可能な試行案を検討した。具体的には、より実践的な技術・技能の習得をめざす観点から、インターンシップの期間の延長や実施形態の複線化を図るとともに、共同研究への積極的な参加を促した。また、熟練技能士や企業技術者による直接指導メニューの実施や液晶関連に関する内容の授業への組み入れなど、より現場に近い知識や技能・技術力を身につけさせるための試みに力を入れた。 ○企業見学会に関しては、早い時期からの目標の明確化を図るねらいから、対象を拡大して1年生から実施することとした。インターンシップに関しても、機械科、制御・情報科、電気科では期間延長して5日間実施した。 ○定着指導の充実や求人依頼の一環として、今年度新たに進路指導担当職員に加えて各科職員による企業訪問を実施した。卒業生の現状や企業の実態等に関しての情報交換を行うことで、連携を密にしていた。	B ○本年度に実施した「実社会を見通し、実社会と連携した学校実践」をもとにした取り組みの課題に対する改善策を講ずるとともに、デュアル版インターンシップの本格実施に向けた実施形態・内容の確立を図っていく。 ○本プロジェクト終了後の企業との連携体制(支援組織の立ち上げや人材バンクの設置等)について検討する。 ○「地域産業の担い手育成プロジェクト」の具体的なメニュー実施に当たっては、関係機関との調整や企業との綿密な事前・事後の話し合いの時間を確保する。 ○インターンシップのねらい等に関しての事前指導を徹底することで、生徒個々が自分自身にあった目標や目的を明確化させる。
	○地域代表対象の学校評価アンケートで「地域と積極的に連携している」に肯定的な人の割合が75%以上になるように努める。 ○学校公式HPの更新回数を必ず前年度以上とする。 ○学年別懇談会、学科別懇談会等の1年間のPTA行事の平均参加者の割合が前年以上となるよう努める。	○各科で研究、製作したものを文化祭の「鳥工TEC」で展示し、地域住民に参加を呼びかける。 ○各科合同課題研究発表会を学校外で実施し、広く県民に公開する。 ○近隣の中学生を対象とした「ものづくり教室」や近隣の小学生を対象とした「科学遊び広場」を実施し、ものづくりの魅力を発信する。 ○学校公式HPの刷新を図り、情宣活動を充実する。	○「地域と積極的に連携している」に肯定的な人の割合が今年度8.9%となったが、「テクノボランティア」の実施や「鳥工TEC」への参加呼びかけ、津ノ井地区文化祭やポリテクセンター技能祭への出品、清掃活動等の継続的な活動が評価された結果である。 ○今年度、公式HPのリニューアルを行い、内容をより充実するとともに、卒業生の皆さんへのコーナーやリンク先の設定などの情宣活動に努めた。なお、学校公式HPの更新回数は目標をクリアした。 ○保護者の理解と協力を得て、1年間のPTA行事の平均参加者の割合についての目標が達成できた。 ○今年度新たに取り組んだ中学生対象の「ものづくり教室」や本校教職員による中学校への「出前授業」は概ね好評であり、ものづくりの魅力を発信や工業高校への理解に繋がった。	B ○合同課題研究発表会は、下級生の課題研究に関する明確な目標設定に繋がりが、「工業教育」の魅力を県民にアピールする機会ともなり、継続的な取り組みとしていく。 ○本校教育活動の一層の理解と協力を得るため、公式HPの卒業生、保護者向けの情報発信の充実を図る。 ○他校では顔を見ない取り組みである「津ノ井地域懇談会」の実施形態、内容の工夫・改善を図る。 ○中学生対象の「ものづくり教室」や本校教職員による中学校への「出前授業」に関しての参加呼びかけや要望アンケートの対象校を拡大する。

評価基準 A: 十分達成 B: 概ね達成 C: 変化の兆し D: まだ不十分 E: 目標・方策の見直し
 [100%] [80%程度] [60%程度] [40%程度] [30%以下]